

道南のヒバを見直そう

広谷 巍

最近の造林の大きな問題の1つにカラマツ先枯病がある。被害面積はカラマツ全造林地の15%にもおよび、生長量の減退や他樹種への改植をよぎなくされた。このためカラマツに代る外国樹種の導入が試みられたが、そのいずれも事業的に造林するには問題があって、カラマツに代る造林樹種としてとりあげるものが見あたらない現状である。惜しいことにこれら外国樹種の導入をはかるまえに郷土樹種をじっくり見なおすことが忘れられていた。その1つに道南地方のヒノキアスナロ（ヒバ）がある。道南に桧山という立派な地名があり、かつて道南の山は青森地方のヒバ林と同様にヒバで黒々としていたであろう。古く松前藩の財政を支えていたものはニシンとヒバ材であったと云われている。ニシンは幻の魚と化してしまっただが、ヒバはどうであろうか。ヒバもニシンと同様に大半が消えさって地名にしか残っていないと思っている人も多いかと思う。その一因はヒバの天然林はすべて江差地方の国有林であり、一般の目にふれることが少ないということもあろう。現在道南地方のヒバの蓄積は約90万㎡で、同地方のスギの蓄積とほぼ同じ数量であって、殆んどすべてが天然林である。

この道南の主要樹種が造林樹種としてとりあげられず、林木育種事業の対象からもはずされて、精英樹の選抜さえ行なわれていない現状である。従来造林が行なわれなかった理由の一つは天然林の主伐の樹令が200年近く、伐期がながいということである。もう1つは過去の造林の多くが不成績であったことである。伐期がながいということは天然林のトドマツやエゾマツと同様であり、不成績造林地はヒバの特性を充分理解しなかった点が大いと思われる。民間では小面積ではあるが、本文にもあるようなトドマツに劣らない成績の造林地もあり、松前林務署管内の池岱造林地には0.4haの小面積ながら優良造林地があって、造林技術の改善によって、トドマツに劣らない成績が得られるものと思われる。

ヒバは多くの利点を有している。第一に天然更新が可能で、耐陰性が高く、植え込みなどに利用できて、天然林施業ができる。つぎに野兎嵐に強い、また乾燥にも強く、適地はスギよりも広い。材価がたかく、ヒノキに次ぐ高級材になり得ることは特に強味である。

道南地方の林業にとってこの多くの特性を有するヒバを造林のサイドからスポットをあてる必要がある。ヒバに適した施業方法を開発することにより、道南の埋れる宝に陽光をあて、桧山が地名でなく、名実ともに桧山である日がくるであろう。

早急に現存優良林分や精英樹の保存と、既往の不成績造林地の原因の究明、天然林施業の方法、そして生長量の大きい造林手段の研究が必要である。当試験場道南分場ではスギの研究と併せてヒバの問題ととりくんでゆく方針である。ヒバに関心のある方は江差営林署管内の目名沢などのヒバの天然林を視察されることをおすすめしたい。こんな美事な針葉樹の山が道南にあったのかと、道南の山を再認識されることであろう。

(研究第二部長)